

2025 年度 教育課程

専 門 分 野

専 門 分 野

位 置 づ け

本分野は、基礎分野，専門基礎分野で得た知識・技術・態度を活用し，あらゆる健康レベル，あらゆる発達段階にある対象の看護の必要性を判断し，あらゆる医療活動の場においても，適切な方法で看護を実践するための基礎的知識・技術・態度を養うための領域として位置づける。

目 的

あらゆる健康レベル，あらゆる発達段階にある対象特性に応じて，看護の必要性を判断し，あらゆる場の状況に応じて，適切な方法で看護を実践するための看護実践能力を習得する。

2025 年度 教育課程

專 門 分 野（基礎）

基 礎 看 護 学

構築の考え方

基礎看護学は、学生が看護について理解を深め、看護の専門性を追求するとともに、創造的・発展的に物事を考えられるような基礎的能力を養う領域として位置づける。

少子高齢化の問題、国民の健康に対する意識の高まり、また経済的な問題を背景に医療改革が進み、これに合わせて看護師の果たす役割・機能の拡大が顕著となり、その真価が問われる時代となった。看護師には、療養生活支援の専門家として、的確な判断と適切な看護技術の提供が求められている。

そこで基礎看護学においては、対象が必要とする看護の根拠を、看護理論や看護技術とのつながりの中で理解するとともに、看護師としての倫理観を培い、高度な看護実践の遂行に役立つ知識・技術、判断能力および調整能力を養う必要がある。

基礎看護学は、対象である人間と人間の生活についての理解が基盤となる。しかし、学習者の生活体験の乏しさに加え、日常生活の自立度が年々低下している。また、看護師は自ら考え、判断し、行動する能力が求められる。そこで、学生が強い関心と意欲をもって、能動的・主体的な学習に臨めるような工夫が必要となっている。

さらに現代は、医療の高度化・専門化が進む一方で、医療機関の入院期間は短縮し、重度な要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らすことを可能とする地域包括ケアシステムの構築が進んでいる。看護師には、対象を「生活者」の視点で捉え、場を問わず「今・ここで」必要な看護を提供できる能力が求められている。

これらのことから、基礎看護学の授業科目は看護学概論、看護の基本となる技術Ⅰ～Ⅴ、日常生活援助技術Ⅰ～Ⅲ、健康状態別看護Ⅰ～Ⅲ、臨床判断の計15単位（375時間）ならびに看護の基礎となる施設実習Ⅰ・Ⅱ、看護実践実習、看護過程展開実習Ⅰ～Ⅲの計10単位（420時間）で構成し、合計単位数を25単位（795時間）とする。

看護学概論は、看護を学ぶ上での導入部分であり、看護の概念をとらえ、健康の社会的意義や看護の位置づけと役割の重要性について理解する。

看護の基本となる技術は、対象理解のための技術、対象に合わせた看護を実践するための看護過程展開の技術、人間関係成立のための技術、対象への教育的かわり技術について理解する。

日常生活援助技術は、健康的な日常生活行動を支援するための技術を理解・習得する。

健康状態別看護は、対象の健康障害の治療経過に合わせた看護や、診療の補助技術、対象の状態を的確に捉え、状況に合わせて判断・看護を実践する方法を理解する。

臨床判断では、「看護師が考えるように考える能力」の育成をめざし、「その時・その場」の状況に応じて、対象を観察・把握し、適切な看護を実践するための基礎的能力を養う。

看護の基礎となる施設実習Ⅰは、療養する場としての病院・病床と、療養する対象を理解するとともに、療養を支える支援者としての看護の役割と機能の概要を理解する。

看護の基礎となる施設実習Ⅱは、対象の状態や生活に気づき、コミュニケーションを図り、よりよい人間関係を構築する技術、対象の状態を把握するための観察技術を習得する。

看護実践実習は、医療を受ける対象を理解するとともに、対象の状態を把握し、対象に応じた日常生活援助技術を実践する能力を習得する。

看護過程展開実習Ⅰ～Ⅲでは、対象に応じた看護を実践するために、学習した看護過程展開の技術を適用し、問題解決技法の基礎を習得する。

基礎看護学

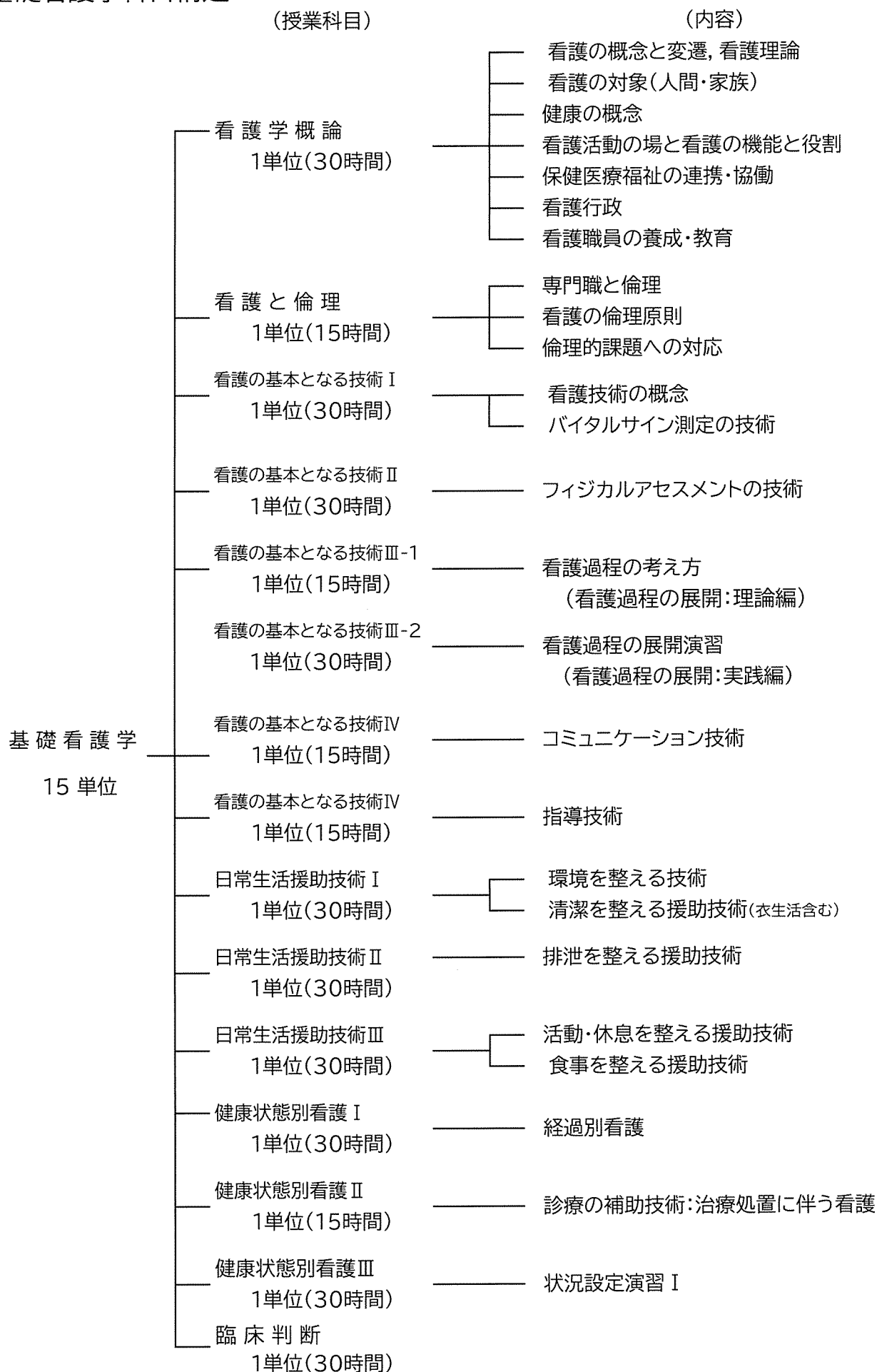
目 的

看護の対象である人間を理解し，看護実践に必要な基礎的知識・技術・態度を習得するとともに，保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解する。

目 標

- 1 看護の対象や機能について理解するとともに，保健医療福祉の場における看護の役割の重要性を理解する。
- 2 看護実践に必要な基本的看護技術を習得する。

基礎看護学科目構造



科目名	看護学概論						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	川那子 清美（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	「看護とは何か」を概念的に捉え、健康の社会的意義、看護の位置づけと看護の機能と役割を理解する。						
回 数	内 容					授業形態	
1～3回	1 看護の概念 1) 看護の語源 2) 看護の概念の変遷 3) 看護の定義 4) 看護であること・看護でないこと（ナース・ロール） 2 看護の変遷（看護の歴史） 1) 看護の起こり 2) 宗教による看護 3) 職業的看護のめばえ 4) 職業的看護 5) 看護の専門職化（教育制度等）					講義 GW	
4～6回 7～9回	3 看護理論 1) 理論の意味（看護実践の理論知と実践知） 2) 理論の分類 (1)大理論 (2)中範囲理論 (3)小範囲理論 4 さまざまな看護理論 1) V.ヘンダーソン 2) A.ウィーデンバック 3) J.トラベルビー 4) H.ペプロー 5) S.カリスタ・ロイ 6) D.オレム 5 生活統合体としての人間 1) 人間の成長と発達 (1)成長・発達の一般的原則 (2)発達段階・発達課題 2) 環境の変化と対処機制 3) 人間の欲求：マズローの基本的欲求階層論 4) ストレスと適応 5) 疾病、障害の受容過 6 看護の対象としての家族 1) 家族の機能 (家族関係、家族形態の変化、疾病が患者・家族に与える心理社会的影響) 7 健康の概念 1) 健康の概念と健康観の変遷 (1)健康の定義 (2)健康の概念 (3)健康の位置づけ (4)障害の定義 (5)主観的健康と客観的健康 (6)健康と疾病の関係 2) 健康とその影響要因 ・生活環境・生活行動・習慣・労働					講義 GW	

10～12 回	8 看護活動の場 1) 医療提供施設 ・病院 ・診療所 ・助産所 ・介護老人保健施設 2) 保健所・市町村保健センター 3) 地域・在宅 ・在宅看護・訪問看護ステーション ・介護保険施設 ・地域包括支援センター 9 看護活動の場における看護の機能 1) 医療施設における看護活動 ・病院における看護活動 ・保健福祉施設における看護活動 ・チーム医療における看護職の役割・活動 10 看護の機能と役割 1) 看護の法的規定 ・保健師・助産師・看護師・准看護師 2) 看護師の独自機能 3) 看護業務 11 保健医療福祉の連携・協働 1) 他職種の役割 2) 他職種との連携・協働 3) チームアプローチの概念	講義 GW
13～15 回 (45 分)	12 看護行政 1) 看護行政の組織 2) 看護にかかわる診療報酬 3) 看護職員の確保 4) 看護職員の労働環境 13 看護職員の養成・教育 1) 学校における看護教育 2) 現任教育と院内教育 3) 看護師のキャリア形成 4) 看護職員の各種資格と活動 (認定看護師・専門看護師・特定行為研修制度等) 5) これからの看護教育	講義 GW
(45 分)		試験
評価方法 及び観点	筆記試験 } レポート } 等総合的に評価する。 GW }	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論 (医学書院) V. ハンガースン 看護の基本となるもの F. ナイナゲール 看護覚え書き	
参考資料	授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	・サバテキスト等を予習(読んで出席)するような指示が出るので、指示されたことに対しては誠実に取り組むこと。 ・グループワークを複数回実施するので、積極的に参加すること。 ・課題レポート等は提出期限を厳守のうえ、表紙をつけて提出すること。	

科目名	看護と倫理						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15 時間)	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	職業倫理としての看護倫理と、倫理的看護実践のための倫理原則・倫理概念を理解し、倫理的感受性を培い、基本的倫理観を養う。						
回 数	内 容					授業形態	
1 回	1 看護倫理を学ぶ意義 2 専門職と職業倫理（看護倫理） 看護職の倫理綱領					講義	
2 回	3 看護の倫理原則						
3 回	4 看護実践上の倫理概念						
4 回	5 倫理的感受性と倫理的看護実践						
5～7 回	6 倫理的課題と倫理的ジレンマ 倫理的課題発見 倫理的課題に対する対応					講義 GW	
(45 分)						試験	
評価方法 及び観点	筆記試験 GW への参加度 個人ワーク レポート						
	総合的に評価する。						
必須資料（テキスト等）	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論（医学書院） 別巻 看護倫理（医学書院）						
参考資料	・講義に必要な資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・看護職の倫理について深く考え、積極的に探究する姿勢を望む。・グループワークで意見交換をおこなうので、積極的に参加すること。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅰ（バイタルサイン）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	1 年
担当者名	早瀬 恵子（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	対象の状態を把握するための観察技術並びに対象の生命徴候を把握するためのバイタルサインを正しく測定する技術を習得する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回 （45 分）	1 看護技術の概念 1) 技術の意味 2) 技術の種類・分類 3) 技術の成立過程 4) 技術の身につけ方						講義
2～4 回	2 看護におけるヘルスアセスメント 3 フィジカルアセスメントの技術 1) フィジカルアセスメント基本技術 2) フィジカルイグザミネーションの基本技術 ①問診 ②視診 ③触診 ④打診 ⑤聴診						
5 回	胸部の聴診						技術練習
6～10 回	4 バイタルサイン 1) バイタルサインの定義 2) バイタルサインの目的・意義 3) バイタルサインの観察とアセスメント 5 バイタルサインのアセスメント 1) 体温のアセスメント 2) 脈拍のアセスメント 3) 血圧のアセスメント 4) 呼吸のアセスメント 5) 意識状態のアセスメント						講義
11・12 回	バイタルサインの測定						技術練習
13・14 回	バイタルサインの測定（瞳孔・意識レベルの観察含む）						演習
15 回 （45 分）	6 身体計測 1) 体格 2) 運動機能						講義 試験
評価方法	筆記試験で評価する。						
必須資料 （テキスト）	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 看護が見える③ フィジカルアセスメント（メディックメディア） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・サグテキスト等を予習（読んで出席）するような指示が出た場合は、指示されたことに対して、誠実に取り組み、必ず指示を厳守すること。 ・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨むこと。 ・講義内で技術練習時間を設けているが、主体的に各自練習をすること。 ・演習時間は限られているので、主体的に参加することを臨む。また、わからないことは、練習時間や演習時に担当教員に積極的に質問し、技術習得に努めること。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅱ（フィジカルアセスメント）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	稲葉 奈緒美（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	対象の状態を把握するためのフィジカルアセスメントと、看護に活かすためのフィジカルアセスメント技術を習得する。						
回 数							授業形態
1～3回	1 系統的なフィジカルアセスメントと看護 1) 呼吸に関連する症状を示す対象への看護 (1) 呼吸器のフィジカルアセスメント (2) 呼吸機能障害に関連する症状のメカニズム 低酸素血症・高炭酸ガス血症・呼吸困難・咳嗽・喀痰 チアノーゼ (3) 呼吸機能障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 呼吸機能障害に関連する看護上のニーズ充足に向けた看護援助 ① 酸素療法 ② 肺痰ケア：体位ドレナージ						講義
4～6回	2) 循環に関連する症状を示す対象への看護 (1) 循環器系のフィジカルアセスメント (2) 循環障害に関連する症状のメカニズム 胸痛・易疲労感・動悸・不整脈・失神・ショック・浮腫・血圧異常 (3) 循環障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 循環障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ① 腓腹筋の収縮運動						講義
7回	3) 栄養や代謝に関連する症状を示す対象への看護 (1) 腹部のフィジカルアセスメント (2) 栄養・代謝障害に関連する症状のメカニズム (3) 栄養・代謝障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 栄養・代謝障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ① 咀嚼・嚥下障害 等						講義
8回	腹部のアセスメントの実際						演習
9回	4) 安楽に関連する症状を示す対象への看護 (1) 筋・骨格系のフィジカルアセスメント (2) 安楽に関連する症状のメカニズム (3) 安楽に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 安楽に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ①疼痛 ②嘔気・嘔吐 ③ポジショニング						講義

10 回	MMT 弾性ストッキング装着 徒手筋力テスト	演習
11・12 回	5) 認知や知覚に関連する症状を示す対象への看護 (1) 神経系・感覚器のアセスメント (2) 認知や知覚に関連する症状のアセスメント (3) 認知や知覚に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 認知・感覚機能障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助	講義
13・14 回 (45 分)	6) 乳房・腋窩のフィジカルアセスメント 7) 外皮系のフィジカルアセスメント	
15 回	8) 心理・社会状態のアセスメント	
(45 分)		試験
評価方法 及び観点	筆記試験・レポートで評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学④ 臨床看護総論 (医学書院) 看護が見える フィジカルアセスメント (メディックメディア) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)	
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	・上記テキスト等を予習(読んで出席)するような指示が出た場合は、指示されたこと に対して、誠実に取り組み、必ず指示を厳守すること。 ・看護技術の演習に、授業で使用了資料やテキストの該当箇所を復習して臨むこと。 ・講義内で技術練習時間を設けているが、各自練習して臨むこと。 ・練習時間は限られているので、主体的に参加することを臨む。	

科目名	看護の基本となる技術Ⅲ-1（看護過程の展開：理論編）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （15 時間）	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	看護の基本となる科学的根拠に基づく看護を実践する能力を習得するため、看護過程の考え方とアセスメントの枠組みであるゴードンの機能的健康パターンについて理解する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 看護過程とは 1) 看護過程とは何か 2) 看護過程の5つの構成要素 3) 問題解決過程と人間関係過程 2 看護過程を展開する際の基盤となる考え方 1) 問題解決過程 2) クリティカルシンキング 3) リフレクション 3 看護過程を用いることの利点						講義 GW
2～7回	4 看護過程の各段階 1) アセスメント ※ ゴードンの機能的健康パターンの概要を含む 2) 問題の明確化（看護診断） 3) 計画立案 4) 実施 5) 評価 5 看護記録 6 看護過程まとめ						
(45 分)							試験
評価方法 及び観点	筆記試験 レポートの内容 } 総合的に評価する						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 看護過程の解体新書（学研） 基準看護計画（照林社） ゴードンの看護診断マニュアル（医学書院） 症状別看護過程（医学書院）						
参考資料	・ 授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・ この科目では、看護過程の基本的な考え方について学ぶため、各自が「考える」ことを重視する。看護過程の思考過程を身につけられるよう、教科書や参考資料、配布資料を用いながら、主体的に講義に取り組むこと。 ・ 演習には積極的な参加を期待する。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅲ-2（看護過程の展開：実践編）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	看護過程やゴードンの機能的健康パターンに関する知識を活用しながら、事例を通して、看護過程を展開するための基礎的能力を習得する。						
回 数	内 容						授業形態
1～5回	1 ゴードンの健康的機能パターンの理解 1) 各パターンの定義 2) 各パターンのアセスメントをするために必要な基礎知識 3) 各パターンのアセスメントの視点						講義 個人ワーク GW
6～15 回	2 事例展開 1) 事例展開に取り組むための基礎知識 2) 看護過程の各段階 （1）アセスメント ・アセスメントの実際 ・情報の統合（関連図） （2）問題の明確化 ・看護上の問題の優先順位 ・看護診断の確定 （3）計画の立案 ・目標・期待される成果の明確化 ・具体的な介入方法の検討 （4）実施 ・実施時のポイント ・実施と記録 （5）評価 ・日々の実施の評価 ・看護過程全体の評価 3 看護過程のまとめ						
評価方法 及び観点	GWへの参加状況 課題への取り組み姿勢 課題の提出状況・内容 レポートの内容						総合的に評価する。
必須資料 （テキスト等）	看護過程の解体新書（学研） 基準看護計画（照林社） ゴードンの看護診断マニュアル（医学書院） 症状別看護過程（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・この科目では、事例展開を行いながら看護過程の理解を深めていく。そのため、各自が「考える」ことを重視する。看護過程の展開：理論編の講義内容やこれまで学んだ知識を活用しながら積極的に考え、看護の思考を身につけていくことを期待する。 ・この科目では、課題の提出状況や課題の内容だけでなく、学習に取り組む姿勢も含めて評価を行う。講義や学習には主体的に取り組むことを期待する。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅳ（接遇・コミュニケーション技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	鯉淵 久子（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	看護実践の基礎となる良好な人間関係構築のための接遇や、技術としてのコミュニケーションを理解する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 看護・医療におけるコミュニケーション 1) 人間にとってのコミュニケーションの意義 2) 看護・医療におけるコミュニケーションの目的と特徴 3) 看護・医療におけるコミュニケーションの重要性 2 関係構築のためのコミュニケーションの基本 1) 接近的コミュニケーションの基本となる態度 (1) あいさつ (2) 身だしなみ (3) 言葉遣い (4) 立ち居振る舞い・視線						講義 GW
2・3 回	看護としての接遇						演習
4 回	2) 接近的行動と非接近的行動 3) 効果的なコミュニケーションの実際 (1) 傾聴の技術 (2) 情報収集の技術 (3) 説明の技術 (4) アサーティブネス						講義 GW
5・6 回	意図的なコミュニケーション (聴きたいこと・知りたいことを気持ちよく尋ねる)						演習 ロールプレイ
7 回	3 コミュニケーションに障害がある対象への対応 1) 言語的コミュニケーションに必要な身体機能 2) コミュニケーション障害のある対象への対応						講義
(45 分)							試験
評価方法 及び観点	筆記試験 GW・演習への参加態度 レポート課題						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論 (医学書院) 患者とのコミュニケーション (サイオ出版) 看護コミュニケーション (第2版) (医学書院) 医療接遇とコミュニケーション (日本看護学校協議会共済会)						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・コミュニケーションの授業の GW には積極的に参加する姿勢を望む。・コミュニケーション技術は「心理学」「人間関係論」の予習・復習をして臨む。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅴ（指導技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （15 時間）	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	対象の健康の保持・増進や健康の回復並びに疾病の予防のためにおこなう教育・指導技術を理解する。						
回 数	内 容						授業形態
1・2回	1 看護における学習支援 1) 看護における学習支援とは何か 2) 看護師の役割としての学習支援 2 健康に生きることを支える学習支援 3 学習支援に活用される健康行動理論 1) 健康信念モデル（ヘルス・ビリーフ・モデル） 2) 自己効力感（セルフ・エフィカシー） 3) 変化のステージモデル 4) 計画的行動理論 5) ストレスとコーピング 6) 社会的支援（ソーシャルサポート） 7) コントロール所在						講義
3回	3 学習支援の進め方 1) 学習ニーズのアセスメント 2) 指導計画と実施 （1）指導計画書の作成 （2）個別指導と集団指導 （3）指導方法と指導用具						
4・5回	4 学習支援の実際 1) 指導計画の立案						GW
6・7回	2) 指導の実際 3) 評価						演習 ロールプレイ
(45 分)							試験
評価方法 及び観点	筆記試験 GW・演習への参加態度 レポート課題						総合的に評価する。
必須資料 （テキスト等）	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論（医学書院） ＜参考図書＞ 中範囲理論入門（日総研） 健康行動理論の基礎（医歯薬出版） 健康行動理論実践編（医歯薬出版）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・基礎分野「教育学」を復習して臨む。 ・指導計画を立て、ロールプレイで実践してもらうので、積極的な参加姿勢を望む。						

科目名	日常生活援助技術Ⅰ（環境を整える・清潔を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	稲葉 奈緒美（実務経験のある教育者：看護師） 高橋 祥子 （ // ）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて，日常生活行動（環境調整・清潔）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回 数	内 容						授業形態
<環境> 1・2回	Ⅰ 環境を調整する技術 1 援助の基礎知識 1) 人と環境 2) 療養生活と環境 3) 生活環境の調整 2 病室と環境の調整 1) 病室・病床の選択 2) 温度・湿度 3) 光と音 4) 色彩 5) 空気の清浄とにおい 6) 人的環境 3 援助の実際 1) ベッド周囲の環境 2) 病床を整える技術 (1) マットレス・枕の条件 (2) ベッドメイキング (3) リネン交換						講義
3回	病床の実際						講義
4回	リネン交換						演習
<清潔> 1回	Ⅱ 清潔の援助技術 1 清潔の援助の基礎知識 1) 皮膚・粘膜・口腔内の構造と機能 2) 清潔援助の効果 3) 患者の状態に応いた援助選択の視点と留意点 2 清潔援助の実際 1) 入浴・シャワー浴 2) 部分浴：手・足浴						講義
2回	足浴						技術練習
3回	足浴						演習
4回	3) 洗髪 4) 整容 5) 口腔ケア						講義
5・6回	洗髪と整容						演習
7回	6) 全身清拭 7) 陰部洗浄 3 衣生活の援助 1) 衣服の援助の基礎知識 (1) 意義 (2) 熱発生と熱放散・衣服気候・衣服のニーズ 2) 病衣・寝衣の交換の実際						講義

8・9回 (45分)	全身清拭と寝衣交換	技術練習
10・11回 (45分)	全身清拭と寝衣交換	演習 試験
評価方法 及び観点	筆記試験で評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ (医学書院) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)	
参考資料	授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・技術練習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にする。 ・演習時間内に実施できない場合は、自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。	

科目名	日常生活援助技術Ⅱ（排泄を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	1 年
担当者名	高須　みのり（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて、日常生活行動（排泄）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回　数	内　　　容						授業形態
1・2回	1　人間にとっての排泄 2　排泄のイメージと看護師に求められる基本姿勢 3　排泄のメカニズム 4　排泄に影響を及ぼす因子 5　排泄の観察とアセスメント						講義
3回	6　トイレにおける排泄の介助 7　床上排泄の援助						
4・5回	尿器・便器の取扱い 尿器便器を用いた排泄の援助						演習 技術練習
6回	8　オムツによる排泄の援助 1）床上排泄の対象理解 2）失禁のある対象理解						講義
7・8回	オムツ交換						演習
9回	9　排便障害のある対象の援助 1）便秘改善のための看護援助 2）浣腸・摘便						講義
10・11回 （45分）	浣腸						演習
12回	10　排尿障害のある対象の援助 1）排尿障害のメカニズム 2）排尿障害への援助：一次的導尿と持続的導尿 3）持続的導尿の管理						講義
13・14回	一次的導尿						演習
15回	ストーマケア						講義
（45分）							試験
評価方法 及び観点	筆記試験で評価する。						
必須資料 （テキスト等）	系統看護学講座　専門Ⅰ　基礎看護学③　基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止から見た基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・演習・技術練習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にしたうえで臨むこと。 ・演習時間内に実施できない場合は、自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。						

科目名	日常生活援助技術Ⅲ（活動・休息を整える技術，食事を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	1 年
担当者名	半村 博美（実務経験のある授業科目：看護師） 皆川 かおり（実務経験のある教育者）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて，日常生活行動（活動・食事）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回 数	内 容					授業形態	
<活動休息> 1 回	Ⅰ 活動・休息を整える看護技術 1 活動と休息の意義					講義	
2・3 回	2 活動への援助：ボディメカニクス・体位変換の技術					講義	
4 回	3 苦痛の緩和・安楽の確保の技術 電法					講義	
5 回	4 褥創の予防						
6 回	5 運動機能の低下した対象への援助技術					講義・GW	
7～9 回 （45 分）	6 体位変換 移乗・移送・歩行の介助 の実際					演習	
10 回	7 睡眠・休息の援助					講義	
<食事> 1 回	Ⅱ 食事を整える看護技術 1 食事援助の基礎知識					講義	
2 回	2 食事摂取の介助						
3 回	3 食事摂取の介助の実際					演習	
4 回	4 非経口的栄養摂取の援助					講義	
5 回	5 非経口的栄養摂取の援助の実際 - 経管栄養法 -					演習	
（45 分）						試験	
評価方法及び観点	筆記試験で評価する。						
必須資料 （テキスト等）	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ （医学書院） 根拠と事故防止から見た基礎・臨床看護技術 （医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・看護技術の演習には，講義で使用了た資料やテキストの該当箇所を復習して臨。 ・技術練習前には指定の DVD 学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にする。・演習時間内に実施できない場合は，自己学習時間で練習を行う。・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。						

科目名	健康状態別看護Ⅰ（経過別看護）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	2 年
担当者名	外部講師（実務経験のある授業科目：看護師） 外部講師（実務経験のある授業科目：看護師） 外部講師（実務経験のある授業科目：看護師）						
ねらい	健康障害の経過に伴って生じる対象の身体的・心理的・社会的特徴を理解するとともに、健康回復に向けた医療の経過に応じた看護を理解する。また、対象の年齢による特徴を踏まえた健康障害の経過に応じた看護を理解する。						
回 数	内 容						授業形態
急性期 1 回	1 急性期における看護 1) 急性期とは （1）急性期の特徴 （2）急性期の患者のニーズ （3）急性期にある患者への援助						講義
2・3 回	2 周術期の看護 1) 手術療法の看護と目的 2) 手術療法による生体侵襲と侵襲刺激に対する生体反応 3) 手術前の看護 4) 手術中の看護 5) 手術後の看護 6) 周術期における対象別看護 （1）小児の周術期看護 （2）高齢者の周術期看護						
4 回	3 集中治療看護 1) 集中治療・看護の役割 2) 集中治療室における看護の実際						
回復期 1 回	4 リハビリテーション期の看護 1) リハビリテーション期とは 2) リハビリテーション医療の特徴 3) リハビリテーション期の患者のニーズ （1）ICF による障害の分類 （2）障害受容のプロセス （3）障害受容への影響因子 （4）身体的ニーズ 身体可動性障害とセルフケア不足生活再構築へのニーズ （5）心理的ニーズ 自己概念の混乱、自己尊重に対するニーズ （6）社会的ニーズ						講義
2 回	4) リハビリテーション期にある対象と家族への看護 （1）身体可動性障害とセルフケア不足に対する援助 （2）心理・社会的な援助 障害受容への援助（障害の受容過程に応じた支援） （3）生活の再構築に向けた援助						講義 GW

3・4回	5) 退院支援の援助技術 (1)療養の場の移行に伴う看護援助の必要性 (2)退院支援の実際 (3)退院支援活動 6) リハビリテーション期における対象別看護 (1)小児のリハビリテーション期看護 (2)高齢者のリハビリテーション期看護	講義
慢性期 1回	5 慢性期の看護 1) 慢性期とは 2) 慢性期治療の特徴 (1)病とともに生きる対象と家族 (2)生活習慣・ライフスタイルの変更・調整 3) 慢性期の経過をとらえる視点 4) 慢性期の患者のニーズ (1)セルフケア (2)健康障害を受容すること (3)自分らしく生きること	講義
2回	5) 慢性期にある対象への援助 (1)セルフケア獲得に向けた支援 (2)セルフケア行動継続への支援 (3)セルフケアに適した環境の調整 (4)社会的支援の獲得への援助 (1)家族・患者会への支援 (2)特定疾患治療研究事業の適用 (3)社会資源の活用 6) 慢性期における対象別看護 (1)小児の慢性期看護 (2)成人の慢性期看護 (3)高齢者の慢性期看護	講義 GW
終末期 1回	5 終末期の看護 1) 終末期とは 2) 終末期医療の特徴と現状 3) 終末期の患者と家族のニーズ (1)身体的ニーズ 疼痛のメカニズムと疼痛コントロール (2)心理的・社会的ニーズ 全人的苦痛（トータルペイン） (3)社会的ニーズ (4)自分らしく生き抜く (5)満足ゆく看取りへのニーズ	講義
2回	4) 終末期にある対象への援助 (1)エンドオブライフケア (2)状態に合わせた日常生活の援助 (3)症状に関する苦痛への援助 (1)症状のメカニズムと症状マネジメント (2)疼痛コントロール (3)ACP:アドバンスケアプランニング (4)心理的安寧への援助	

3回	5) 終末期にある対象の家族への援助 (1)家族の心理の理解とケア 死の準備教育：デスエデュケーション (2)家族へのグリーフワーク・グリーフケア (3)家族の生活の再構築へのケア	
4・5回 (45)	6) 終末期における対象別看護 (1)小児の終末期看護 (2)成人期の終末期看護 (3)高齢者の終末期看護：意思決定支援	
(45 分)		試験
評価方法 及び観点	筆記試験 GW 参加度 レポート } 総合的に評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学④ 臨床看護総論 (医学書院) 専門Ⅱ 成人看護学① 成人看護学総論 (医学書院) 別巻 リハビリテーション看護 (医学書院) <急性期> 別巻 臨床外科看護総論 (医学書院) <終末期> 系統看護学講座 別巻 緩和ケア (医学書院)	
参考資料	授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	・予習・復習をして臨むこと。 ・科目内容が細分化され、複数の講師が担当するので、出席管理は辞管理のうえ、欠席しないように体調を整え、授業の臨むこと。 ・各看護学領域の経過別看護に通ずる科目のため、積極的な授業姿勢を望む。	

科目名	健康状態別看護Ⅱ（診療の補助技術：治療処置に伴う看護）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15 時間)	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者）						
ねらい	健康障害や診察・治療の経過に応じた対象の特徴を理解し、回復の促進に向けて、それらに応じた看護が実践できる基礎的知識を理解する。また、対象の診察・検査・治療の意義や目的を理解し、それらに伴う対象への看護技術を習得する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 診察・検査・処置における技術 1) 診察の介助の目的 2) 診察時の看護師の役割 3) 診察時の体位と介助 2 検査の特徴と理解 1) 検体の採取とその取扱い ①血液検査 ②尿検査 ③便検査 ④喀痰検査						講義
2 回	真空採血管を用いた静脈血採血						演習
3 回	2) 検査に伴う看護 ①X線検査 ②コンピューター断層撮影 (CT) ③磁気共鳴画像 (MRT) ④内視鏡検査：上・下部消化管 ⑤超音波検査 (エコー検査) ⑥心電図検査 ⑦核医学検査 3 生体情報のモニタリング 1) 生体情報のモニタリングの意義 ①心電図モニター ②SpO2モニター (パルスオキシメーター) ③血管留置カテーテルモニター						講義
4 回	4 穿刺・洗浄の意義と理解 1) 穿刺の意義 2) 穿刺の種類 ①胸腔穿刺 ②腹腔穿刺 ③腰椎穿刺 ④骨髄穿刺						
5 回	3) 洗浄の意義 4) 洗浄の種類 ①胃洗浄 ②気管支洗浄						
6～7 回	5 創傷治癒の看護 1) 創傷治癒の経過・促進 ①創傷治癒のための環境づくり ②創傷処置 (創洗浄・創保護) ③創傷管理技術 (包帯法) 2) ドレーンの管理 ①ドレーン創の処置 ②テープによる皮膚障害 (テープ固定)						
(45 分)							試験
評価方法	筆記試験で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ (医学書院) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・看護技術の演習には、講義で使用了た資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・演習前には指定の DVD 学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にしたうえで演習に臨むこと。 ・演習時間内に実施できない場合は、自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。”						

科目名	健康状態別看護Ⅲ（状況設定演習Ⅰ）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 （時間数）	1 （30 時間）	対象 年次	2 年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者）						
ねらい	既習知識を統合し、対象の状態に応じた援助を実践する基礎的能力を習得する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 複数の看護技術を統合した実践 1) 事例をもとに、健康障害をもつ対象の療養生活上のニーズを把握し、既習知識と技術及び倫理的態度を踏まえて対象に適した援助を実践・評価する。 (1) 疾患・障害をもつ対象者の情報収集とアセスメント						講義 GW
2～5 回	(2) 看護上の問題と看護計画						
6～11 回	計画に基づく実践練習（タスクトレーニング）						講義・演習
12～14 回	(3) 援助の実施 環境・スクリーニング・フィジカルアセスメント・清潔・排泄・活動・コミュニケーションの各技術の中から、複数技術を組み合わせた援助を実践する。 ＊実施した援助の報告と記録を含む。 （自己の実践の振り返り）						技術試験
15 回	(4) 評価						
評価方法 及び観点	レポート課題と技術試験で評価する。						
必須資料 （テキスト等）	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・グループワークや技術試験に向けた技術練習には積極的な授業姿勢と望む。 ・実習前には技術試験を課す。 不合格の場合には、自己練習のうえ、合格するまで再試験を課す。（合格のうえで実習には臨ませることとする。 ・課題レポート等は提出期限を厳守のうえ、表紙をつけて提出すること。						

科目名	臨床判断						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	川那子 清美（実務経験のある教育者）						
ねらい	看護師のように考えることをめざし，臨床での「気づき・解釈」を実践につなげていく思考過程を習得する。						
回 数	内 容					授業形態	
1 回	I. 臨床判断 概要 1 講義前課題の意味・臨床判断を行う理由・今後の流れ					講義	
2～7回	2 症状別看護 ① 1) 「呼吸困難」を訴える患者の対応 2) 「気づき」「解釈」「反応」「省察」を体験する 3) 事例の看護を考える					講義 GW	
7～14回	3 症状別看護 ② 1) 「腹痛」を訴える患者の対応 2) 「気づき」「解釈」「反応」「省察」を体験する 3) 事例の看護を考える						
15回	まとめ グループ発表					発表と講義	
評価方法 及び観点	提出物とパフォーマンス課題(ルーブリック評価)で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学④ 臨床看護総論（医学書院） 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学① 成人看護学総論（医学書院） 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学② 呼吸器（医学書院） 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学③ 循環器（医学書院） 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学⑤ 消化器（医学書院） 症状別看護過程（医学書院）						
参考資料	・ 授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・ DVD 学習や調べ学習等を指示するので，必ず指示されたことを厳守のうえで授業に臨むこと。 ・ グループでの課題もあるため，主体的に参加すること。 ・ 演習やグループワークには積極的な参加姿勢を望む。						

2025 年度 教育課程

専 門 分 野
(地域・在宅)

地 域・在 宅 看 護 論

構築の考え方

在宅看護論は、地域で生活しながら療養する人とその家族を対象とし、地域で生活する人々の健康問題への援助について総合的に理解し、在宅における看護が実践できる基礎的能力の育成をめざす領域として位置づける。

近年、地域に生活する人々は、人口構造および疾病構造の変化に伴う医療体制改革や、家族形態の変化による介護不足問題等から、在宅におけるケアニーズを拡大させている。

また地域で生活する人々は、核家族の増加もあり個人主義の傾向が強くなり、多様な価値観の尊重を求めるようになっていく。それに治療優先の療養から、自らの生活ニーズに合わせた療養へ、そして受け身から自ら選択する療養へと形態を変化させてきている。

そのため看護師には、単に在宅療養の看護技術の提供だけでなく、施設内看護と在宅看護との相違を踏まえ、療養者や家族の QOL・自己決定を尊重し、セルフケアを促進することが求められている。そして対象のもつ諸問題に対し、専門的知識・技術を活用し解決していく役割がある。さらには、終末期看護を含む在宅での看取りを充実させていくことも課題となっている。また対象が安定した生活を継続していくために、地域保健医療福祉機関との連携・協働を図っていくことが重要となる。

これらのことを踏まえ、地域・在宅看護論では既習の知識・技術を統合しつつ、地域で生活しながら療養する人々とその家族の特徴を理解し、対象に応じた看護を判断し実践する基礎的能力を養う必要がある。しかし、学生は生活体験が乏しく、在宅で療養している対象をイメージできない傾向にある。また、対人関係形成能力も未熟である。

そこで、まず、人々の暮らしや地域で暮らす人々を理解する必要がある。そのうえで、在宅で療養する人々は「生活者」であることを意識し、それぞれの人には家庭・家族があり、「地域社会の中で役割をもって生活している人」として捉えられるよう、看護の視野を広げて学習を進めていく必要がある。

以上のことから、地域・在宅看護論の授業科目構成は、看護の基礎となる地域演習Ⅰ・Ⅱ、地域で暮らす人々と看護、地域・在宅看護論概論、地域・在宅看護論援助論Ⅰ・Ⅱの6単位（130時間）並びに地域・在宅看護論実習2単位（90時間）とし、合計単位数は8単位（220時間）とする。

看護の基礎となる地域演習Ⅰでは、地域で暮らす生活者の環境・生活者の思い・生活者を支える人たちの現状を知る。

看護の基礎となる地域演習Ⅱでは、医療機関と地域をつなぐ退院支援と地域包括ケアの実際を知り、対象が療養する生活の場・看護師が活動するさまざまな場における看護の役割を理解する。

地域で暮らす人々と看護では、人々が暮らす地域を総合的に理解するとともに、地域における課題と看護の役割を考察する。

地域・在宅看護論概論では、地域で療養する対象の特性を理解し、地域保健医療福祉チームにおける連携のあり方と看護の機能と役割を理解する。

地域・在宅看護論援助論Ⅰでは、地域・在宅という場で展開される看護の実践に必要な基礎的知識を理解するとともに、生活の場に訪問する際の基本的マナーを理解・習得する。

地域・在宅看護論援助論Ⅱでは、地域・在宅の場で展開される看護の実践に必要な基礎的知識・技術を理解する。

地域・在宅看護論

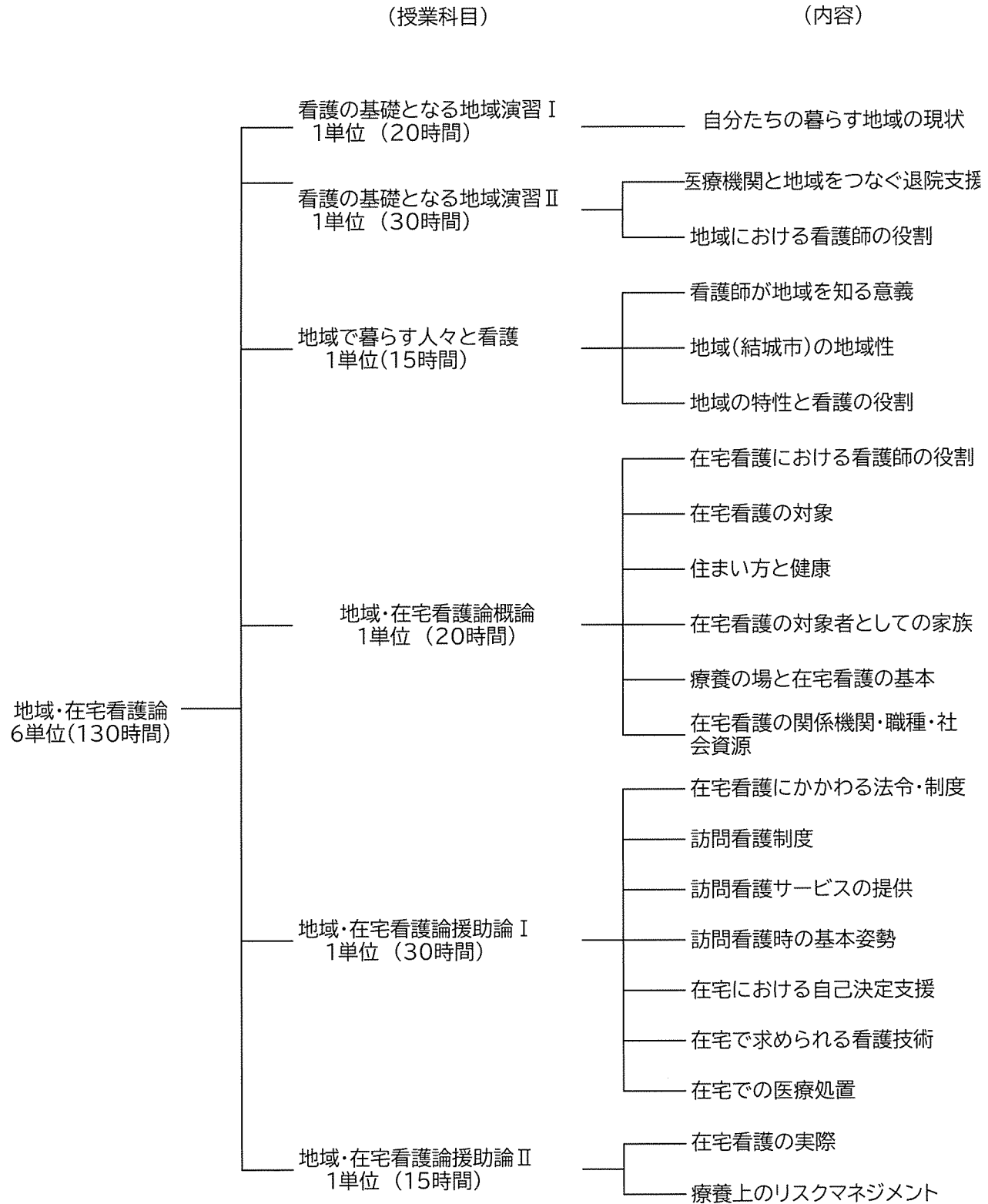
目 的

地域で生活しながら療養する人々とその家族の特徴を理解し，対象に応じた看護を実践するための基礎的能力を養う。

目 標

- 1 地域で生活しながら療養する人々と，その家族の特徴を理解する。
- 2 対象の健康の保持増進と，在宅での療養が継続できるための看護を理解する。
- 3 地域保健医療福祉チームにおける連携のあり方と看護の役割を理解する。

地域・在宅看護論 科目構造



科目名	看護の基礎となる地域演習Ⅰ						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (20 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	稲葉 奈緒美（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	暮らしとは何かをあらためて考え、暮らしの多様性と共通性を学び、暮らしと健康の関係について考える。また、地域での暮らしを支える人たちの現状を知る。						
回 数	内 容					授業形態	
1 回	1 人々の暮らしの理解 1) 暮らしとは 2) 暮らしの多様性と共通性					講義	
2 回	2 暮らしと健康の関係 1) 暮らしのなかで生じる健康問題とその影響 2) 家族の暮らしと健康 3) 健康の多様性 4) 健康をとらえる看護の視点					講義	
3 回	3 さまざまな場、さまざまな職種で支える地域での暮らし					講義	
4 回	4 演習オリエンテーション 1) 演習の目的 ①地域での自宅以外の暮らしの場の実際を知る ②地域での暮らしを支える人たちを知る 2) 演習への心構え ①対象者の説明 ②接遇・身だしなみ ③コミュニケーションの留意点 3) 演習での学びの視点と演習方法 3) 施設別オリエンテーション					講義	
5・6 回	5 施設演習					施設見学	
7・8 回	6 まとめ（体験したことをねらいに沿っての分かりやすく他者に説明するための準備）					GW	
9・10 回	7 学びの共有・まとめ					発表	
評価方法 及び観点	GW 参加度 レポートの提出状況 レポートの内容					総合的に評価する。	
必須資料 (テキスト等)	地域・在宅看護の基礎 （医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・体験したことを説明できるよう事前学習をして臨むこ。 ・看護学生であることを自覚し、主体的な学習行動とマナーを厳守すること ・GW には積極的な参加姿勢を望む。 ・発表時は質疑応答を行ない、互いの学びを深めること。						

科目名	看護の基礎となる地域演習Ⅱ						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	酒井 一成（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	暮らしの理解と暮らしの基盤となる地域の理解を踏まえ、その人にとっての健康を維持しながら地域で暮らすことを支える退院支援や地域包括ケアの実際を知る。また地域での暮らしを支援する看護師のあり方を考察する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 地域包括ケアシステムと地域共生社会 2 地域包括支援センターの概要						講義
2 回	3 地域での療養の場の概要と看護の継続性 1) 療養の場の移りかわり ①入院後の転棟・転院 ②退院後のさまざまな療養の場 2) 退院支援・退院調整について 3) 地域における他職種連携						講義
3・4・5 回	4 地域での暮らしを支える支援やしゅみ（演習事前学習） 1) 退院支援・退院調整 2) 地域包括ケアシステム 3) 地域包括支援センター 4) 地域における他職種連携						個人学習 グループ学習
6 回	5 演習オリエンテーション 1) 演習の目的 ①人々の地域での暮らしを支える支援としての退院支援や、 地域包括支援センターでの活動の実際を見学することで、事前 に学習した内容の理解を深める ②演習を通し、地域の人々の健康と暮らしを守る支援に必要な 看護師の姿勢について考察する 2) 見学の視点と演習方法 3) 施設別オリエンテーション						講義
7～10 回	6 地域連携室または退院支援・調整の場面の見学						演習
11～13 回	7 まとめ （演習での体験を見学の視点に沿ってまとめ、そこから「地域で暮らすこと」を支援する上での看護師のあり方を考察する）						GW
14・15 回	8 学びの共有・まとめ						発表
評価方法 及び観点	GW の参加度や学習姿勢 レポートの内容・提出状況 筆記試験						総合的に評価する。
必須資料 (テキスト等)	地域・在宅看護の基礎 （医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・体験したことを説明できるよう事前学習をして臨むこと。 ・看護学生であることを自覚し、主体的な学習行動とマナーを厳守すること。 ・GW には積極的な参加姿勢を望む。 ・発表時は質疑応答を行ない、互いの学びを深めること。						

科目名	地域〈結城市〉で暮らす人々と看護						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (20 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	市職員（実務経験のある教育者） 海老沢 佳代（実務経験のある看護師）						
ねらい	暮らしの基盤としての地域の特性や、そこで暮らす人々の健康と地域のつながりを理解する。						
回 数	内 容						授業形態
1 回	1 暮らしと地域 1) 地域とは 2) 人々の暮らす地域の多様性						講義
2 回 ～ 3 回	2 学校のある地域〈結城市〉の理解 1) 自然環境（位置・地形・気候） 2) 社会的環境（市役所・交通の便・産業・公園・運動施設・店舗・近隣とのつながりなど） 3) 健康状態（人口動態：人口，年齢3 区分の人口の割合・死亡率・出生率・合計特殊出生率など，平均寿命，健康寿命，死因順位，受療者数，がん検診受診率など） 4) 子育て・教育環境（学校・保育所・幼稚園・学童保育） 5) 介護事業統計（要介護認定割合、要介護認定者の有病状況など） 6) 医療施設（特定機能病院，地域医療支援病院，病院，診療所など） 7) 保健施設（保健所，市町村保健センター，母子健康包括支援センター，精神保健福祉センター） 8) 介護施設（地域包括支援センター，介護老人保健施設， 介護老人福祉施設，居宅サービス施設） 9) 福祉施設（福祉事務所，児童相談所，児童福祉施設，障害者福祉施設など） 10) 訪問看護ステーション 3 地域〈結城市〉マップの作成と活用方法 4 地域の生活環境が健康に与える影響						講義
4 回 ～ 8 回	5 地域マップの作成 1) 地域マップを作成し「地域」で暮していくための必要な事、活用できる資源について考える 2) 地域の特性とその地域で健康的に暮らすための課題や看護の役割について考える。						グループ学習
9・10 回	8 発表・まとめ（担当した地域の特性と事例検討結果やその地域で健康的に暮らすための課題について発表する）						発表
評価方法	GW 参加度レポートの提出状況 レポートの内容						総合的に評価する。
必須資料	地域・在宅看護の基礎（医学書院）						
参考資料	・ 授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・ 主体的に学習し，グループで協同して学習を進めること。 ・ GW には積極的な参加姿勢を望む。 ・ 発表時は質疑応答を行ない，互いの学びを深めること。						

科目名	地域・在宅看護論概論						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (20 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	半村 博美（実務経験のある授業科目：看護師） 飯島 明子（ // ）						
ねらい	ライフステージや健康レベルの側面から地域・在宅看護の対象者や地域・在宅看護の機能と役割を理解する。さらに地域・在宅看護に欠かせない予防活動や家族看護の視点を養う。						
回 数	内 容						授業形態
1・2回	1 在宅看護の目指すもの 1) 在宅看護が提供される場 2) 在宅看護の場の広がり 3) 在宅看護に求められていること 4) あらゆる面から QOL を考える 2 在宅看護における看護師の役割						講義
3・4回	3 在宅看護の対象者の特徴 1) 発達段階からみた対象者の特徴 2) 健康段階からみた対象者の特徴 3) 障害からみた対象者の特徴 4) 療養状態別にみた対象者の特徴 4 住まい方と健康 5 家族 1) 在宅看護の対象者としての家族 2) 家族の捉え方と看護師の関わり 3) 家族のアセスメント 4) 家族への支援 5) 地域システムの視点から家族を支える （地域のサポート ピアサポート レスパイトケア）						講義
5・6回	6 在宅看護の提供方法 1) 外来看護 2) 訪問看護 3) 施設での看護 4) 通所サービスでの看護 7 療養の場の移行 1) 患者・家族の意思決定支援・調整 2) 退院支援・退院調整 3) 入退院時における医療機関との連携 4) 入退所時における施設との連携 8 在宅看護の基本となるもの						講義

7～10 回 (45 分)	9 在宅看護の関係機関・職種と社会資源 1) 在宅における社会資源とは 2) ケアマネジメントと社会資源の活用 3) 地域における多職種連携 4) ケアマネジメントと社会資源の活用 5) 地域における多職種連携 (1) 在宅における連携の特徴 (2) 医師との連携 (3) 地域の社会資源との連携 (4) ネットワークづくり	講義
	10 対象者（家族も含む）の権利保障 1) 個人の尊厳 2) 自己決定権 3) 個人情報の保護 4) 看護師の守秘義務など 5) 成年後見 6) 虐待の防止 7) サービス提供者の権利擁護 8) 法律問題の事例 11 在宅看護における看護師の倫理	講義
(45 分)		試験
評価方法 及び観点	筆記試験で評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門 地域・在宅看護の基盤 (医学書院)	
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	・予習・復習をして臨むこと。 ・「看護の基礎となる地域演習Ⅰ」の内容を復習して臨む。	

科目名	地域・在宅看護論援助論Ⅰ						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	2 年
担当者名	外部講師（実務経験のある授業科目：看護師） 外部講師（実務経験のある授業科目：看護師）						
ねらい	地域・在宅という場で展開される看護の実践に必要な基礎的知識を理解するとともに、生活の場に訪問する際の基本的マナーを理解・習得する。						
回 数	内 容						授業形態
1～3回	1 在宅看護に関わる法令・制度 1) 介護保険制度 2) 医療保険制度 3) 障害者総合支援法 4) 難病法 5) 医療介護総合確保推進法 6) 医療法 7) その他の主な公費負担医療 2 介護保険制度 1) 保険者・被保険者・受給権者 2) 利用の手続き 3) 介護保険で給付対象となるサービス 4) 利用料 3 訪問看護の制度 1) 訪問看護の利用者と訪問回数 2) 訪問看護ステーションに関する規定 3) 訪問看護の利用までの手順 4) 訪問看護の費用 4 訪問看護サービスの提供 1) 訪問看護の提供とチームケア 2) 訪問看護ステーションの管理・運営 3) 訪問看護サービスの質保証 4) 訪問看護の記録						講義
4～6回	5 訪問看護時の基本姿勢 6 在宅における自己決定支援 1) 在宅看護の活動を支えるコミュニケーション (1) 訪問時のマナーと態度 2) 在宅看護の展開の視点 (1) 生活動作のアセスメントと生活行為への動作 (2) 必要な介助を見極めるための動作分析 7 在宅で求められる看護技術 1) 食生活・嚥下 2) 排泄 3) 移動・移乗 4) 清潔						講義

7～15 回 (45 分)	1 フィジカルアセスメント 2 在宅での医療処置 1) 褥瘡(創傷も含む) 2) 尿道留置カテーテル 3) ストーマケア(人工肛門・人工膀胱) 4) 経管栄養・胃瘻・経鼻経管栄養法 5) 在宅中心静脈栄養法 6) 非侵襲的陽圧換気療法(NPPV) 7) 在宅酸素療法(HOT) 8) 在宅人工呼吸療法(HMV)と排痰法 9) 疼痛緩和 * 在宅酸素療法*非侵襲的換気療法*在宅人工呼吸器療法含	講義 演習
(45 分)		試験
評価方法 及び観点	筆記試験で評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門 地域・在宅看護の実践 (医学書院) 国民衛生の動向(厚生統計協会) 公衆衛生が見える 第3版(メディックメディア)	
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	在宅看護に関わる法令・制度については、関係法規Ⅰで履修済のため、復習及び自己学習してから臨むこと。	

科目名	地域・在宅看護論援助論Ⅱ						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15 時間)	対象 年次	3 年
担当者名	外部講師（実務経験のある授業科目：看護師） 外部講師（実務経験のある授業科目：看護師）						
ねらい	地域・在宅の場で展開される看護の実践に必要な基礎的知識・技術を、事例を通して理解する。						
回 数	内 容					授業形態	
1～6 回	在宅看護の実際 1 在宅看護介入時期別の特徴 2 在宅療養者の状態別看護 1) 認知症・独居療養者 2) 難病の療養者 3) 小児の療養者 4) COPD の療養者 3 在宅におけるエンドオブライフケア 1) 在宅におけるエンドオブライフケアの特徴 2) エンドオブライフケアの特徴 3) 在宅終末期の特徴と療養の経過 4) 症状のコントロール（緩和ケア） 5) 自己決定への支援 6) 家族への支援 7) グリーフケア					講義 *DVD 視聴 「在宅看取り」	
7 回	4 療養上のリスクマネジメント 1) 在宅看護におけるリスクとは 2) 環境の整備による安全の確保 3) 身体損傷の防止 4) 薬物による事故の防止 5) 感染の防止 6) 災害に対する準備と対応					講義	
(45 分)						試験	
評価方法	筆記試験で評価する。						
必須資料（テキスト等）	系統看護学講座 地域・在宅看護の実践（医学書院） 国民衛生の動向（厚生統計協会） 公衆衛生が見える（メディックメディア）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・実習に直結する内容なので、十分に理解できるよう望む。 ・複数の講師が担当するので、出席時間は自己管理のうえ、体調を整え、欠席しないように臨むこと。 ・積極的な授業姿勢を望む。						